



## 年の瀬の思い出…「足るを知る」子に

子どもの頃、年の瀬になると「もうすぐお正月だから」と、新しい服を買ってもらえるのがうれしくてたまらなかったことを思い出します。また、クリスマスにはケーキを食べられるのが楽しみで楽しみで待ち遠しくてたまらなかったことも……。



それは、ふだん買ってもらえなかったからこそ、その喜びが大きかったのだろうと考えます。

ところで、家庭裁判所に勤務された経験をお持ちの弁護士さんは、その講演で、「最近の家裁に送致されてくる少年たちの中には、両親そろっていて経済的にも裕福な家庭の子が増えています。その子たちに共通するのは『恵まれているのに不満だらけで、“足るを知らない”』点です。」と話されました。

さて、今から450年ほど前、世は戦国時代。各武将たちは天下統一を目指して競っていました。その中でも、天下に最も近いと言われたのが駿河の今川義元。当時の義元は三河の徳川家から幼い男児の竹千代を人質に取っていました。そのとき、義元は、家臣たちに竹千代を「むごく育てよ」と命じたそうです。義元が命じた“むごく”とは、「子どもの欲しがるものは何でも与えて、厳しいことや辛いことは一切させず、甘やかし放題に育てること」で、武士としては役に立たない人間にしまえという意図があったと伝えられます。

その結果はご存知の通り。義元が「桶狭間の戦い」で織田信長に敗れたため、竹千代はむごく育てられることなく、人質としての辛い環境の中で忍耐強く育ちました。その後、信長や秀吉の下で武将として厳しく鍛えられ、やがて時を経て、「関ヶ原の決戦」で勝利し、江戸幕府を開いた徳川家康その人です。

現在は450年ほど前とは比較にならないほど便利で豊かになりました。テレビや漫画、高性能ゲーム機、様々なゲームソフト、パソコンやタブレット、スマホ、……等、子どもの欲しがるものが何でも与えられた快適すぎる環境は、正に“むごい環境”そのもの。このような“むごい環境”で育てていると、「恵まれているのに“足るを知らない”不満だらけの人間」になること請け合い。

ドイツの教育学者ザルツマンも「かにかの本～子どもを悪くする手引き」という本の中で「子どもを確実に不幸にする方法は、子どもが望むとおりに物を与えることである。」と述べています。

しかしながら、我が子かわいさの余り、子どもが望むとおりに物を与えている家庭は意外と多いのでは……？



かわいい子から「ねえ、お願いだから〇〇を買って」とおねだりされると、ついつい買ってあげたくなるのは親の情。しかし、その願いに簡単に応じることは、決して子どものためになりません。「我慢」とか「辛抱」とかさせる経験が乏しい時代だからこそ、親が強い意志を持って子どもの要求を拒否することも必要です。その代わりに、子どもが本当に欲しがっている物については、すぐに買い与えず、我慢に我慢をさせ、年の瀬にクリスマスプレゼントとして贈ってあげたらどうでしょう。きっと、喜びに満ちた心からの「ありがとう」が、子どもから発せられることでしょう。「足るを知る」子に育てたいですね。